

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 7 月 9 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22300227

研究課題名（和文） 配偶者間暴力の介入・予防プログラムの開発

研究課題名（英文） Development of intervention and prevention programs for domestic violence

研究代表者

森田 展彰（MORITA NOBUAKI）

筑波大学・医学医療系・准教授

研究者番号：10251068

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、配偶者間暴力（Domestic Violence, 以下 DV）の予防・介入を行うマニュアル化された教育プログラムを開発し、その有効性の検証を行うことである。3つの研究を行った。1）海外で用いられているプログラムを参考にして配偶者間暴力を行っている対象に対するプログラム（1クール12回、小グループ方式）を作成し、これを実際にDV加害を行っている男性に対して試行して、その前後に質問紙を行い有効性を検証した。その結果、STAXIによる怒りの表出の尺度の有意な低下を認め、プログラム後の参加者の評価でも肯定的評価を受け、有効性が確かめられた。特に参加者の感想から、加害責任の自覚や自分の考え方の変化を報告する者が多かった。2）中学高校生に対するDVの意識調査を行った上で、予防プログラムを作成して、施行した。プログラムにより、暴力的な関係性に対する正しい認識が高まることが確認された。一方、1か月後には認識がもとに戻る部分があり、暴力への意識を定着させるにはアフターフォローが必要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

I and my colleague developed the domestic violence intervention program for adult male batterer and the dating violence prevention program for students. We did the research of efficacies of them. The research of the domestic violence intervention program for adult male batterer showed significant decrease of "Anger-out scores" of STAXI and significant increase of listening skill for the female partner's words between before and after the program. The research of prevention program for high school students showed significant increase of awareness of controlling relationship and abusive behaviors between before and after the program. However, the effects of prevention program did not continue for 1 month, and so we need a sustainable program to radicate the awareness of violence.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
総 計	4,000,000	1,200,000	5,200,000

研究分野：精神保健学

科研費の分科・細目：社会医学・法医学

キーワード：犯罪精神医学 ドメスティックバイオレンス

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、ドメスティックバイオレンス（以下 DV）がその被害者である配偶者や子供に心身に深刻なダメージことがわかってきており、司法的な問題としての側面のみでなく、公衆衛生上の問題としても取り上げられるようになってきている。DV の発生状況については、平成 14 年の内閣府の調査結果によれば女性の 5 人に 1 人が体験していることがわかり、その対応が急務とされる。DV 加害者は、夫婦関係・家族関係における歪んだ考え方が定着しており、単純な罰則や女性との切り離しでは加害行為をやめることはできず、教育プログラムが必要であると考えられ、北米を中心にそうしたプログラムが広く行われ、効果をあげている（Bennett ら, 2001.）。日本では、DV への対応としては被害者援助が取り組まれているものの、DV 加害者自身への介入はまだ始まったばかりである。2003 年に内閣府は加害者プログラムの満たすべき要件の検討を行い、翌年にはその要件に基づくプログラムの試行を行ったものの、最終的には被害者への体制作りを優先することとなり、加害者へのプログラムの公的な機関として導入は見送られてきた。申請者は、この内閣府によるプログラムの検討と試行に関与したこともあり（森田展彰：配偶者からの暴力に関する加害者向けプログラムの満たすべき基準と実施に際しての留意事項、内閣府男女共同参画局, 2005）、そうしたプログラムの有効性・必要性を感じ、公的導入が見送れた後も NPO 団体（リスペクトフルレーションシッププログラム研究会、略称 RRP 研究会）の活動として、加害者プログラムを約 5 年間実践し、プログラム内容や有効性について検討を重ねてきた。（森田展彰：ドメスティックバイオレンス加害者プログラム、精神療法, 33, 58-60, 2007.）

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、配偶者間暴力（Domestic Violence, 以下 DV）の予防・介入を行うマニュアル化された教育プログラムを開発し、その有効性の検証を行うことである。主に 2 つのタイプのプログラムを策定した

①DV 行動パターンが確立してしまった群に対する DV 加害男性に対する更生プログラムの作成とその有効性の検討

②学生群における DV の認識に関する実態を明らかにした上で、予防プログラムを開発し、その有効性を検証する。なお、学生の群のプログラムを行うのに先立ち、学生が持っている DV に関する知識や暴力に対する認識について実態を明らかにして、その上でプログラ

ムがこれにどのような影響を与えるかを検討する。

3. 研究の方法

(1) DV 加害者更生プログラムの作成と有効性の検証

①DV 加害者更生プログラムの作成

カナダや米国の DV 加害者プログラム提供団体での調査や研修や従来の文献をもとに DV 加害者に対する教育プログラムを作成した。

②プログラムの有効性の検証

対象：DV 加害者更生プログラムの参加をインターネットや相談機関などを通じて募集をして、事前面接などで十分な受講動機が明確で、休まず参加できることが確認された男性に対して、プログラムを施行した。2010 年から 2012 年にかけて行った 4 クール（1 クール 12 週間）のプログラム参加者に対して、調査協力をお願いした。21 名の方のアンケートを行った。このうち前後のアンケート両方を記入できていたのは 15 名で、これについて主に解析を行った。

調査内容：了承を得られた参加者に対して、開始直前、直後に、質問紙を施行した。

- ・ STAXI2(State-Trait Anger Expression Inventory-2)：怒りの量と表出の状態・特性を測定する尺度。今回は、STAXI2 をパートナーとの関係の場面で感じる怒りについて評価させた。

- ・ POMS(Profile of Mood Scale)

- ・ 暴力行動のチェックリスト
- ・ 支配的人間関係のチェックリスト
- ・ 暴力やその防止への理解に関する質問票
- ・ プログラムの満足度、有用性
- ・ その他プログラムに関する感想や自分と相手が変わったと思う点、変わらないと思う点

(2) 中学高校生の DV の認識の状況とこれに対する教育プログラムの開発

①学生の DV 認識の状況

対象：中学高校生：都市部における A 都立中高一貫教育進学校の男女生徒中 1：120 名(男 56, 女 64), 中 2 が 119 名(男 57, 女 62), 中 3 が 115 名(男 52, 女 63), 高 1 が 78 名(男 40, 女 38), 高 2 が 73 名(男 38, 女 35)の総計 505 名であった。質問紙を 1 枚ずつ封筒に入れて各クラスの担任教師に配布と回収を依頼し、その結果を分析検討した。

調査内容：DV の知識および DV につながる考え方についての質問を行った。10 項目の質問紙を行った。

②中高生向けの DV 予防プログラムの作成

米国の Love U2 という Dating Violence Prevention Program の健康的な関係性、Lenore E. Walker 氏の暴力のサイクルを参考

にして、「お互いを尊重し合う教育プログラム 人間関係を大切にするため-Domestic Violenceを知る-高校生編」を作成した。
③中高生向けのDV予防プログラムの有効性の検討

対象：2012年10月から12月に、都市部における男女の比率も均等な、進学高校で介入プログラムを1回（50分で約40名ずつ）、実施した。対象者の内訳は、高1の介入群40名（男20，女20），非介入群38名（男20，女18），高2の介入群38名（男19，女19），非介入群35名（男19，女16）であった。非介入群には特別なプログラムは行わず、質問紙のみを行った。介入群と、質問紙のみを行う非介入群の抽出は、普通科のクラスから、各学年1クラスずつ、学校側に無作為で選んでもらった。

調査内容；先述した「DVにつながる考え方10項目」の質問紙を、介入群にはプログラム直前、直後、1か月後の3回、非介入群はベースライン、1か月後の2回行った。更に、介入群には、終了後にプログラム内容の有効性についての質問を行った。

4. 研究成果

(1) DV加害者更生プログラムの開発

①プログラムマニュアルの作成

出来あがったプログラムは、クローズド形式の小グループ（8-12人程度）で、男女1名ずつのファシリテーターが進行を行う。12回1クール（反復可能）であり、任意参加であるが、基本的には全回に出席することを求めている注。プログラムの各回の内容は、表2に示す通りである。これに含まれる主な介入の要素としては「加害責任の自覚と動機付け」、「ABCモデルによる認知の修正」、「スキル訓練」、「再発防止」、「被害者の安全性への対応」がある。各回の内容について表1に示した。

表1, DV加害者更生プログラムの内容

プレセッション：インテークと契約のセッション
第1回：暴力とは？
第2回：認知行動モデル（ABCDモデル）による暴力の理解
第3回：暴力につながる信念Bについて
第4回：自分の感情Cと感情表現Dについて
第5回：暴力の影響1（パートナーに対する）
第6回：暴力の影響2（子どもに対する）
第7回：自分の暴力に対する責任
第8回：健康なコミュニケーションを学ぶアサーティブ
第9、10回：ロールプレイを用い、各自にとって問題となる場面の自分や被害者の考え

感情-行動を変える練習をする。
第11回：被害女性の視点からの自分の暴力の見直し
第12回：再発予防計画
ふりかえりセッション

②加害者更生プログラムの有効性の検証

プログラム前後でデータをとることができた15名について心理テストの結果を表2に示す。STAXI得点の変化をみると「怒りの表出」の得点が有意に低下していた（対応のあるt検定、 $P<0.01$ ）また特性怒りの得点の低下も有意傾向であった（対応のあるt検定、 $P<0.10$ ）。POMSについては、混乱の得点があり有意に上昇していた（対応のあるt検定、 $P<0.01$ ）。

表2. プログラム前後におけるSTAXIとPOMSの得点の変化

心理尺度	サブスケール	測定時期	N	平均値	標準偏差	P値
STAXI	特性怒り	ブレ	15	27.9	5.7	.061
		ポスト	15	24.5	4.6	
	怒りの表出	ブレ	15	22.0	4.2	.007
		ポスト	15	18.9	4.9	
	怒りの抑制	ブレ	15	18.9	5.1	.356
		ポスト	15	20.2	1.8	
POMS	不安-緊張	ブレ	15	11.1	4.5	.671
		ポスト	15	10.5	5.0	
	抑うつ	ブレ	15	9.1	5.3	.891
		ポスト	15	9.3	4.7	
	敵意-攻撃	ブレ	15	10.3	4.7	.152
		ポスト	15	8.1	4.9	
	活力	ブレ	15	6.9	3.6	.127
		ポスト	15	7.9	3.8	
	疲れ	ブレ	15	10.3	5.4	.522
		ポスト	15	9.5	5.2	
	混乱	ブレ	15	9.4	3.7	.002
		ポスト	15	13.4	3.7	
	全般的な情動的障害 (TMD)	ブレ	15	43.4	16.7	.924
		ポスト	15	42.9	18.9	
対応のあるt検定(両側検定)						

暴力行動については、表3に示した。前後での有意な変化が認めない。明確に暴力が減っているケースもあったが、反対にむしろ、暴力行動が事前よりも点数があがっているものがあったが、これは自分の暴力を以前より否認しなくなり、暴力として認めることができるようになる場合が含まれている可能性がある。また、パートナーと別居している事例も半数近くいたこともあり、具体的なやり取りがない場合には変化がないということになるので、これらのことが変化を示さなかった要因であると思われる。

暴力の本質は、身体的な攻撃行動以上に

支配的な関係と考えられており、プログラムも中でも関係の持ち方について取り上げている。そういう意味で、暴力行動の尺度とは別に、支配的関係尺度を用いた。その結果としては、「質問攻めや論破で追い詰める」は得点が、有意傾向の変化を示した（Wilcoxon の符号付順位和検定、 $P<0.10$ ）。それ以外の変化は認めなかった。

表 3. 暴力行動の変化

	度数	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	P値
相手に何かいやがらせをした	14	2.07	1.69	2.07	1.33	.865
相手を罵倒したり、ののしったりした	14	3.71	2.13	2.71	1.44	.121
相手に対して大声で怒鳴った	14	3.57	2.17	2.79	1.25	.258
相手を言葉で脅して性交させた	14	1.00	.00	1.36	.93	.180
相手にナイフや凶器を向けたことがある	14	1.00	.00	1.14	.53	.317
相手とケンカ中に相手が気が遠くなるほど、頭をたたいたことがある	14	1.21	.43	1.29	.61	.564
相手とのケンカが原因で、相手に医者にかかる必要があるほどのダメージを負わせた	14	1.29	.47	1.36	.50	.317
相手を言葉で脅して口内性交や肛門性交をさせた	14	1.00	.00	1.14	.53	.317
ケガさせるかもしれないような物で相手を殴ったり、たたいたりした	14	1.00	.00	1.00	.00	1.000
相手の首をしめた	14	1.07	.27	1.14	.36	.564
相手とのケンカが原因で、相手は医者にかかった	14	1.29	.47	1.21	.43	.564
相手に性交を（殴ったり、押さえたり、凶器で脅して）強制した	14	1.00	.00	1.00	.00	1.000
相手をさんざん殴りつけた	14	1.21	.43	1.14	.36	.317
相手とのケンカで骨折させた	14	1.07	.27	1.07	.27	1.000
相手に口内性交や肛門性交を（殴ったり、押さえたり、凶器で脅して）強制した	14	1.00	.00	1.00	.00	1.000
合計得点	14	22.50	5.26	21.21	4.53	.260

1名のデータに欠損があったので、残りの14名のデータである。統計は、Wilcoxon の符号付順位和検定。得点は0点:0回、1点:1回 2点:2回、3: 3~5回、4点:6~10回 5点:11~20回、6点:20回~の6点リッカーとである。

暴力やこれを変えることへの認識については表 4 に示した。「パートナーのことをさえぎることなく、受け止める聞き方ができる」の得点が、有意な低下を示した（Wilcoxon の符号付順位和検定、 $P<0.05$ ）。「パートナーに腹が立っても、相手の気持ちを尊重した方法でつたえることができる」の得点が有意傾向の低下を示した（Wilcoxon の符号付順位和検定、 $P<0.10$ ）。

プログラム終了後に有用性や満足度について 6 段階で評価してもらったところ、図 1、のような結果になり、肯定的な意見が多かった。

表 4 暴力やこれを変えることへ認識

	N	度数	平均値	平均値	標準偏差	P値
暴力に取り組んでいるのは、自分の意志でなく、誰かに言われたためだ	12	1.57	1.222	2.00	1.477	0.206
自分は暴力をふるっていないという考えがある。	12	1.64	1.151	1.83	1.115	0.589
暴力を変える責任は、パートナーの側にもあると考えている	12	2.43	1.342	1.92	1.084	0.334
自分の暴力をコントロールする責任が自分にあるとはっきりと認識している	12	4.71	.825	4.50	1.168	0.461
私は考えるだけでなく、自分の暴力をなくすために具体的な努力を行っている	12	4.21	.975	4.33	1.231	0.566
私は、現在は暴力を用いることは減っているが、自分が再び暴力的になる可能性があることを知っている。	12	3.93	1.269	3.92	1.165	0.931
自分の行動や言葉がパートナーにダメージを与えていたことを理解することができる	12	4.64	.842	4.83	.389	0.705
「パートナーが自分に合わせるべきだ」という考えが自分にあったことを理解できる	12	4.29	.994	4.25	.754	0.589
パートナーのことをさえぎることなく、うけとめる聴き方ができる	12	3.14	.864	4.00	.739	0.041
パートナーに腹がたっても、相手の気持ちを尊重した方法で伝えることができる	12	2.86	1.167	3.92	.900	0.072
暴力的な方法をつかいそうになっても、自分で自分にいいきかせてつかわないでその場をきりぬけることができる。	12	3.64	1.008	4.17	.718	0.26
自分の行動や言葉が子どもにダメージを与えていたことを理解することができる	11	3.92	1.706	4.73	.467	0.167
男性のほうが女性より優位であるという考えが暴力の原因になっていることを理解できる	12	4.00	1.177	4.00	1.348	0.564

1名のデータに欠損があったので、残りの14名のデータである。統計は、Wilcoxon の符号付順位和検定。得点は、「当てはまらない」1点から「当てはまる」5点の5点リッカーと得点である。

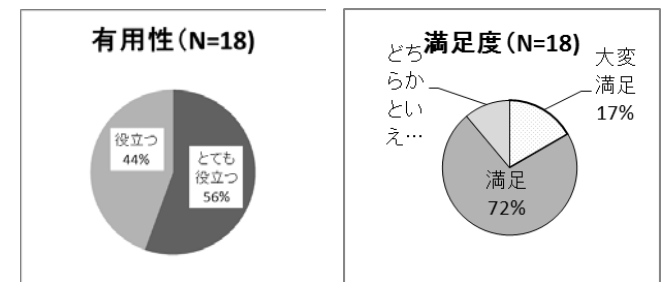


図 1 プログラムの有用性と満足度

プログラムの効果に関する参加者の感想としては以下のようなものが出された。

◆ プログラムで変わったこと

- ・自分の気持ちを無理のない程度にパートナーに伝えられるようになった。
- ・相手への影響を尊重し、考え方や感情を変化させる努力した。
- ・自分の感情に任せて行動しなくなった。
- ・自分の気持ちを少しは伝えるようになった。
- ・怒り等の感情を暴力的な行動で表すのではなく、相手に対して感情を伝える方法を変

- 化させることができたこと。
- ・冷静になれるようになった。
 - ・「～すべき」という考えがなくなった。視点を変えたり、一呼吸おいてイライラすることを回避できるようになった。
 - ・ロールプレイで妻役をして妻の立場が分かった。
- ◆ プログラムを受ける中で変えることが難しいと感じたこと
- ・気分の上下してしまうことを止めること
 - ・本来の性質は変えられない。
 - ・アイメッセージがうまくできない。瞬間的に相手をうちまかせてやろうとおもってしまうところがある。
 - ・暴力的な部分をゼロにしたために、本来自分が持つよい意味での意欲競争心までゼロになってしまった。
 - ・より実践的なノウハウを身に着けられるプログラムであってほしい。
 - ・全てのことで加害者がわるかったと考えることはできなかった。
 - ・いろいろするとことは変わらない。

(2) 中高生の DV 関する知識や考え方について「DV という言葉を知っている」という質問に肯定的な回答をしたと生徒が高 2 は 87.7%，高 1 は 87.2%，中 3 は 87.8%であったが、中 2 は 70.5%，中 1 は 42.5%と低かった。「DV とはどのようなものなのか知っている」に肯定的な回答とした生徒は、高 2 は 83.5%，高 1 は 80.8%，中 3 は 78.3%であったが、中 2 は 55.4%，中 1 は 30.0%と低くなった。この 2 つの質問に対する回答では学年間に差がみられた ($p < .01$ ，Kruskal Wallis 検定)。

DV につながる考え方の質問項目 10 項目は、「関係性の問題」因子と、「威圧的行為の問題」因子の 2 因子から構成されることが確かめられた。前者は、「男性は女性を常にリードするべきだ」「好きな人には嫌われたくないので意見を合わせる」などの異性関係の持ち方の認識に関する因子であり、後者は「威圧的行為」を正しく暴力として認識できるかを示す因子である。両因子に関する項目における内の一貫性が十分な水準にあることを確かめ、関係性問題得点と、威圧的行為認識得点という 2 つのスケールを作成して、どちらも得点が高いほど、暴力に対する正しく認識していることを示す。これら 2 つの得点は、学年間では差がなかったが、男女間に有意差があり、女性の方が有意に高かった。

(3) 中高生向け DV 予防プログラムの開発 ①プログラムマニュアルの作成

できあがったプログラムの内容は表のとおりである。

表 1 DV 予防教育プログラムの内容

- | |
|------------------------------|
| a. 人との出会いについて |
| b. 人を尊重するってどういうこと？ |
| c. 人を尊重できない人ってどういう人？ |
| d. こんな時、どうしますか？男の子の立場、女の子の立場 |
| e. 関係性について |
| f. 暴力とは何か。 |
| g. 暴力の種類について |
| h. 暴力のサイクルについて |
| i. DV とは何か |
| j. DV 被害者の割合について |
| k. 身近で DV が起きたらどうすればよいか。 |
| l. DV の電話相談窓口の紹介 |
| m. 子供への影響について |
| n. 互いを尊重できる会話を作ろう |

日本の教育現場に適合しやすいように、身近で起こりうる題材を例にとりあげながら、生徒をプログラムに引き付けていくことをねらいとした。a から c では、生徒たちの部活動の場面や、授業の場面から、尊重の意味を話し合う形式で、導入を行う。d では、若者の間で起きている DV の例を story telling という手法を用いて、男子が自転車を蹴飛ばして女子を威圧する場面、女子が男子の携帯電話を無理やり取り上げる場面から、e の健康、不健康な関係性の説明に入っている。f ～h では、暴力の説明に入り、Lenore E. Walker 氏の暴力のサイクル、i-m では、DV は暴力の中の 1 つであることの説明へとつなげている。さらに DV 被害に遭遇した時の対処法の説明も行った。プログラムの最後の n では「お互いを尊重できる会話をつくろう」という題材で、明るい未来につなげていけるように作成をしている。

②DV 予防プログラムの有効性

介入群については、DV に対する考え方に関する質問票のうち「関係性の問題得点」は、介入群全体(78 名)は、直前の平均値 12.45(16 点満点)が、プログラムを受けたことにより、直後には、平均値 13.75 に有意に上昇した(対応のある t 検定、 $p < .01$)。しかし、直後に比べると、1 か月後は 12.50 と、有意に(対応のある t 検定、 $p < .05$)低かった。一方、「威圧的行為得点」では、介入群全体(78 名)はベースラインの平均値 9.96(12 点満点)が、プログラムを受けたことにより、直後には、平均値 11.01 に有意に(対応のある t 検定、 $p < .001$)上昇した。しかし、直後に比べると、1 か月後には 9.71 と有意に(対応のある t 検定、 $p < .001$)下がった。非介入群は、直前と 1 か月後では有意差はみられなかった。なお、介入群と非介入群の間では、直前、1 か月後の得点について有意な差はみられなかった。

プログラム直後に、介入群に「『DV を知る』のプログラムは将来、役に立つと思う」について尋ねると 100%が肯定的回答であった。また、「今後も DV のプログラムがあったら受

けたいと思う」「DV についてのプログラムの内容を友人や家族に伝えたいと思う」について、各々80.8%、84.6%が肯定した。

(4) まとめ

DV 加害者更生プログラム(12 回 1 クール、小グループ方式)のマニュアルを作成して、そのうち4クールを施行した。そこに参加した者のうち調査協力を了承した24名についてプログラム前後にデータを取り、十分な回答を得られた15名について分析を行った。その結果、プログラムにより、怒りを相手に表現する特性が低下すること、相手のいうことを最後まで聞くなどのコミュニケーションを意識できるようになる変化がみられた。ただし、加害認識が明確化されることで、感情的には混乱・葛藤する面が強くなる面がみられ、1クールのみでなく長期的な利用で気持ちの整理をしていく必要があると思われた。

中高生に関するDVの予防に関する調査では、もともとのDVの知識や考え方については、学年が高いほど知識があがること、男性より女性の方がDVに対する正しい認識を持っているという所見が認められた。

更に中高生に対するDV予防プログラムを作成して、高校生に対して、これを行ったところ、直後にはDVに対する考え方が有意に良い方向に変化し、またプログラムの有効性について肯定的な感想をもつことが確かめられた。一方、1か月後にこの効果が減ってしまうこともわかり、より長期的なアフターフォローが必要であると考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- (1) Morita, N., Nomoto, Y., Ukeda, E., Sufu K.: How does trauma caused by violence influence the risk of relapse in and effects of cognitive behavioral therapy for drug addicts in prison?, Acta Criminologiae et Medicinae Legalis Japonica Vol. 79 (1)3-15, 2013. 査読あり
- (2) Morita, N.: Psychoeducational Approaches for Domestic Violence Batterers and Abused Women and Children in Japan, The Book of Abstracts 16th World Congress of the International Society for Criminology, 2011, p307-308. 査読なし
- (3) 森田展彰, 岡坂昌子, 谷部陽子, 近藤あゆみ, 高橋郁絵, 岩井喜代仁, 栗坪千明, オーバーヘイム・ポール, 福島ショーン, 鈴木文一, 小松崎未知: 薬物問題を持つ人の家族に対する心理教育プログラムの研究ー長期的な再発防止・回復にむけた家族のスキルトレーニングー, 日本アルコール問題関連学会雑誌 第13巻 149-158

2011 査読あり

〔学会発表〕(計4件)

- (1) 須賀朋子, 森田展彰, 斉藤環, 大谷保和: 高校生へのDV予防教育プログラムの研究、2013年5月19日、日本プライマリ・ケア連合学会学術大会、仙台
- (2) 森田展彰: DV・児童虐待の加害者に対する心理教育プログラム、第10回トラウマ治療研究会、2012年9月2日、東京。
- (3) 森田展彰: 子ども虐待とDVによる子どもの心理的問題とその対応、日本子ども虐待防止学会第16回学術集会、2010年11月27日~28日、熊本
- (4) Morita, N.: Psychoeducational approaches for domestic violence cases; batterer intervention and rebuilding of family relationship, ISFL(the International Society of Family Law) Regional Conference in Japan; Reconstitution of Modern Families - Recent Developments in Asian Family Law, 2010. 11. 2. Tukuba.

〔図書〕(計2件)

- (1) 森田展彰: 家庭内の暴力に関する安全保障・ドメスティックバイオレンスに対する包括的対応、ヒューマン・セキュリティ・ヒューマン・ケアの視点から(松田ひとみ、大久保一郎編)、医学評論社、東京、pp65-82、2013年(3)
- (2) 森田展彰: パーソナリティ障害および暴力、アルコール・薬物の問題、奥山真紀子、西澤 哲、森田 展彰編著: 虐待を受けた子どものケア・治療、診断と治療社、東京、151-164頁、2012.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田 展彰 (MORITA NOBUAKI)
筑波大学・医学医療系・准教授
研究者番号: 10251068

(2) 研究分担者

中谷 陽二 (NAKATANI YOJI)
筑波大学・医学医療系・教授
研究者番号: 30164221 (H22→H23)

(3) 研究協力者

須賀 朋子 (SUGA TOMOKO)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生 (女性ネット Saya-Saya・相談員)

西村 香 (NISHIMURA KAORI)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・大学院生 (臨床心理士)